

IIAS「ゲーテの会」ブックレット
(VOL. 01095)

「新しい文明」の萌芽を探る
ー日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどるー

(思想・文学分野)

「直観」から勇気をもらう
ー自然研究者ゲーテがスピノザに学んだことー

公益財団法人国際高等研究所
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2025 年 2 月 13 日開催の第 95 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

「新しい文明」の萌芽を探る

ー日本と世界の歴史の転換点で、転軸機を動かした「先覚者」の事跡をたどるー

「直観」から勇気をもらう

ー自然研究者ゲーテがスピノザに学んだことー

ゲーテはある手紙の中でスピノザの『エチカ』と、そこで語られる「直観の知」なるものに言及し、自分はこの思想から「私の全生涯を事物の観察に捧げる勇気」をもらったと語っている。その長い生涯のさまざまな時期・さまざまな機会にスピノザへの共感を示していたゲーテだが、どこにどう共感しているのかは大抵の場合ぼんやりしており、このように具体的な典拠を明らかにして語っているテキストは貴重といえる。

スピノザのいう直観の知とはどのような知のあり方か。なぜ、そしてどのような勇気をそこからゲーテはもらったのか。その勇気はスピノザ自身の思想から無理なく導出されたものなのか、それともゲーテがやらかしたある種の（すこぶる生産的な結果を生んだにせよ）誤解・誤読の産物なのか。ゲーテの生涯にわたる自然研究を支えた「直観」の虚実について、わたしが今考えていることをお話してお集まりの皆さまのご高評を仰ぎたい。

吉田 量彦 (Kazuhiko YOSHIDA)

1971 年、茨城県水戸市生まれ。慶應義塾大学文学部、同大学院文学研究科を経て、ドイツ連邦共和国ハンブルク大学にて学位取得（哲学博士）。現在、東京国際大学商学部教授。専門は、ドイツ語圏を中心とする 17・18 世紀の西洋近代哲学。

近著に『スピノザ 人間の自由の哲学』（講談社現代新書）、訳書にスピノザ『神学・政治論』（光文社古典新訳文庫、全 2 巻）がある。他論文、翻訳多数。近年はスピノザ哲学のドイツ語圏での受容史・影響史に関する論文が多い。



目次

はじめにーゲーテとの出会い

- (1) 著作紹介
- (2) ドイツ語圏とのかかわり
- (3) 吉田＝ドイツ哲学の研究者？
- (4) 自分の中で転機になったのは…
- (5) ゲーテとの（わずかな）接点
- (6) なぜ「潜在的」？ー これまでの仕事の中で…

I ゲーテ、スピノザを語る

- (1) 鷗外、ギョオテ（ゲーテ）を語る
- (2) どういう意味で「スピノザ派」？
- (3) テクストの引用が少ないのは…／各論ではなく総論寄りの議論だから？
- (4) 典拠を挙げて語っている希少な箇所
- (5) 文脈の点検ー マクロな観点から
- (6) 論争の推移と拡大
- (7) 文脈の点検ー ミクロな観点から
- (8) ゲーテのダメ出し
 - ① 論争への嫌悪
 - ② 論述技法への懷疑
 - ③ 諧謔趣味への警告
- (9) 形而上学か自然学か
- (10) 「直観／見ること」に話題が収斂し…
- (11) 引用の文脈は判明したが…／この先の方針
- (12) ①を解明するにあたり…

II 属性概念の重要性

- (1) 事物＝個物
- (2) ここでも「属性」が登場ー 属性は説明が難しい
- (3) 実体とは…
- (4) しかしスピノザは…
- (5) 属性抜きの説明に足りないもの
- (6) 属性とは？
- (7) デカルトにおける実体と属性

- (8) デカルトにおける精神と物体（身体）
- (9) スピノザの同一実体・複数属性論
- (10) 神すなわち物体？
- (11) 延長の世界が格上げされる

III 直観の知はどういう知なのか

- (1) あらためて、最初の問いへ…
- (2) なぜ「直観の知」なのか
- (3) 比例数の例
- (4) $x=6$ であることの（非）重要性

IV おわりにースピノザからもらった勇気

- (1) 残る論点は…
- (2) 自然現象は、手ごわい
- (3) それでも「直観的に」分かること
- (4) 自然に「裏」はない

質疑応答

2025 年 2 月 13 日開催

第 95 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：「直観」から勇気をもらう ― 自然研究者ゲーテがスピノザに学んだこと ―

講演者：吉田 量彦（東京国際大学商学部教授）

（文中敬称略）

はじめにーゲーテとの出会い

本講演は、「①はじめにーゲーテとの出会い、②ゲーテ、スピノザを語る、③属性概念の重要性、④直観の知はどういう知なのか、⑤おわりにースピノザからもらった勇気」という流れで進めていく。

講演の趣旨は、ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe: 1749-1832）のスピノザ理解のある側面を切り出して紹介することである。ただ、その話を始める前に、少しでも私がどのような方向の研究者で、どういう経緯でこういうテーマに関心を持つに至ったかということをお話ししておきたい。

（1）著作紹介

お恥ずかしい話、私の日本語での単行本著作はまだこの『スピノザー人間の自由の哲学』しかない。ただ、この他にもスピノザ関連のまとまった書籍としては、スピノザの裏の主著（と私が勝手に呼んでいる）『神学・政治論』の翻訳を光文社から出している（光文社古典新訳文庫、2014 年）。その他、単発の論文、翻訳、エッセイ等々についての個別の紹介は控えたい。私は身体に悪いのでエゴサーチの類は絶対にしないようにしているが、私の名前を Google 等で検索していただくと、研究者情報を集めたポータルサイトが出てくるので、そこで業績一覧を見ることができると思う。ご興味があれば活用していただきたい。



図 1 『スピノザー人間の自由の哲学』
吉田量彦 著（講談社現代新書、2022 年）



図 2 学位論文（2003 年提出、2004 年刊行）

（2）ドイツ語圏とのかかわり

私は最終的にドイツの大学で博士号を受けた関係で、若いころ、ドイツ語圏に比較的長くいた。具体的には北ドイツのハンブルクに 5 年半、その後スイスのチューリッヒに 1 年半いたので、ドイツ語圏の北の端と南の端に合計 7 年いたことになる。

まとまって滞在していた時期は 7 年だが、他にもベルリンには語学研修で通算 3 か月ほどいたし、今でも長期の休みを利用して現地調査や文献収拾に 10 日間～2 週間ほどドイツに出かけたりしている。私がドイツ語で書き、32 歳のときハンブルク大学に提出し、そ

の後ドイツの出版社から刊行された学位論文 (p.6 図 2) がもう 20 年以上経っていると思うと感慨深い。

(3) 吉田 = ドイツ哲学の研究者？

このように若いころからドイツ語圏との縁が深く、今でも母語の日本語以外で読み書き、会話で一番楽に使えるのはドイツ語だが、自分がドイツ語圏の哲学・思想の専門研究者だという自覚は、少なくともこれまで長いこと特になかった。ドイツ語圏には勉強で行っただけという気持ちが強かったし、そもそも研究対象としたスピノザ自身がドイツ語を使っていない。彼が書いたものはラテン語とオランダ語で残っているが、確実に彼自身が書いたと分かるオランダ語のテキストは手紙だけである。いわゆる著作物は、諸説あるが、オランダ語でしか残っていないものも元はラテン語だったのではないかと、つまりすべて最初はラテン語だったのではないかと考えられている。



図 3 Baruch Spinoza (1632-1677) Public domain, via Wikimedia Commons

これはスピノザ (Baruch Spinoza: 1632-1677) という人が生きた時代とも関わっている。17 世紀は、地域によってはたとえばデカルトがラテン語とフランス語で書いているし、現地の近代語でも哲学的な著作が刊行され始めていた時代ではあるが、オランダ語圏もドイツ語圏もまだまだそういう時代ではなかった。たとえば 17 世紀の後半を代表する哲学者としてスピノザと並び称されるライプニッツは、ドイツ人の友人にはもちろんお互いの母語のドイツ語で手紙を書いているが、著作はごくわずかな例外を除きほぼラテン語とフランス語でしか残していない。

(4) 自分の中で転機になったのは…

話を戻すと、ドイツ語圏の哲学・思想については、自分はせいぜい好きでいろいろと読んでいただけの素人の愛好家にすぎないと思っていた。そういう気持ちが徐々に変わってきたのは、今から振り返ると、ドイツ語圏から戻って来て随分と経った 2010 年代のことだったと思う。それまで研究してきたことの延長線上に、18 世紀以降のドイツ語圏でスピノザの哲学がどう受容されていったのか (いかなかったのか)、そういうことに対する関心が芽生え始めたのである。

この点で、ドイツ古典哲学 (昔はドイツ観念論と呼ばれていたが、どうも今はここを専門的に研究している人ほどこの名称を使いたがらない傾向がある) の、特にヤコービの研究で有名なボーフム大学教授のザントカウレン (Birgit Sandkaulen) が 2012 年 (大阪大学) と 2016 年 (一橋大学) に来日したとき、通訳を担当させていただいたのは得難い経験だったと思う。ヤコービ (Friedrich Heinrich Jacobi: 1743-1819) と言えば、いわゆる汎神論論争 (Pantheismusstreit) の中



図 4 Friedrich Heinrich Jacobi (1743-1819) Public domain, via Wikimedia Commons

心人物だが、この論争は実質スピノザ論争なので、これを機にこの論争に絡んだ人たち、ヤコービはもちろん、その周辺にいたヘルダー、そしてゲーテといった人物にも徐々に関心が向かうようになった。

ゲーテと言えば、2016年にザントカウレン氏の通訳をした翌年の2017年から、もう一つの「ゲーテの会」とでもいうような「ゲーテ自然科学の集い」という集まりに参加するようになった。「集い」というカジュアルな名前が付いているが、研究者が集う学術団体、要するに学会で、ドイツ文学者を中心に多方面から人が集まってくる活気ある団体なので、いろいろと勉強させていただいている。

(5) ゲーテとの（わずかな）接点

そういうわけで、本日のもう一人の主演、ゲーテの話になる。長らくゲーテの作品は、有名ないくつかの詩と、あとは『若きウェルテルの悩み』くらいしか読んでことがなかった。これは留学前後に通ったゲーテ・インスティトゥートというドイツ語学校の教材で、プレントドルフ (Ulrich Plenzdorf) という東ドイツの作家の『若きWのあらたな悩み (Die neuen Leiden des jungen W. 1973)』というオマージュ作品を読まされたのがきっかけだった。ハンブルクでの生活が落ち着いた後、ふとオリジナルというか元ネタの方を知りたくなり、レクラム文庫で『ウェルテル』を買って読んでみたのである。

その頃から、ゲーテがスピノザへの「共感」を折に触れて表明していたことは、もちろん知識として知ってはいた。ただ、具体的にどういう「共感」であったのか、当時の私は特に掘り下げてみようという気にはならなかった。ところが、それが「ゲーテ自然科学の集い」の例会でさまざまなゲーテのテキストを読み込んでいくうちに、少なくとも潜在的な関心が高まっていくことになったのである。



図 5 Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832)
ヨーゼフ・カール・シュティ
ーラーの原画からの写真
製版, Public domain.
via Wikimedia Commons

(6) なぜ「潜在的」？ — これまでの仕事の中で…

なぜ「潜在的」なのか。それは、関心はあったが下手に首を突っ込むと面倒くさいことになるだろうと思っていたから、迂闊に手がつけられなかったのである。ゲーテとスピノザの関係、それからゲーテの中のスピノザの位置づけなどは、ちょっと調べてみたくらいではよく分からないだろうという予感があった。ゲーテがスピノザにはっきり言及したテキストは数的に限られているので、一見簡単に調べ尽くせそうだが、厄介なことにそのほとんどは手紙なのである。手紙というのは論文と違って文脈依存的なものなので、ゲーテがスピノザの何にどう「共感」しているのか、手紙をただ読んでも大抵の場合はよく分からないままで終わってしまう。これについては後ほど、具体的な手紙を検討していく際に改めて取り上げたい。

じつは、これまでの私の仕事の中でも、ゲーテとスピノザの関係については何度か触れた

ことがある（たとえば、吉田量彦「超越者のいない世界の倫理と倫理学—内在の倫理、スピノザ、そしてゲーテ」『モルフォロギア』第43号（2021）、p.22-43）。ただ、あくまでそれを直接のテーマとしない論文やエッセイの中でエピソード的に触れた程度だった。そのような中でこちらの「ゲーテの会」から今回の話を持ち掛けられたので、これを契機に、これまで自分の中でぼんやりと考えていたことに多少なりとも目鼻をつけてみようと思い立ったわけである。

Ⅰ ゲーテ、スピノザを語る

そういうわけで、前置きが長くなったが本題に入る。まず、ゲーテがスピノザについて比較的是っきり語っているテキストを取り上げて、内容を検討したいと思う。

（1）鷗外、ギョオテ（ゲーテ）を語る

日本で最初にゲーテのことがまとまった形で紹介されたのは、鷗外（森田太郎）が1913年（大正2年）に刊行した『ギョオテ傳』でのことだったと思う。まだ「Goethe」という、日本語で発音できない名前をどう片仮名で表記するかということさえ決まっていなかった時代で、鷗外はドイツ語に堪能だったのでもちろん発音できたと思うが、片仮名でどう書き記すか悩んだ果てに「ギョオテ」と書いている。そういえば『ギョオテ』とは俺のことかとゲーテ言い」という川柳を昔どこかで聞いたことがある。

この『ギョオテ傳』は、実際は鷗外がゼロからまとめた著作ではなく、ドイツ語著作の翻訳である。当時有名だったビールショウスキー（Albert Bielschowsky）という学者の大がかりな評伝から要所要所を抜き出し、意識も少なからず交えて訳出したものであり、ある研究者は「自由な抄訳と見做すべきもの」と評している（小堀桂一郎『鷗外全集』月報13、p.4）。

この『ギョオテ傳』の中に、ゲーテの思想について解説した「哲学」という一章が設けられているが、これはいきなり「ギョオテはスピノザ派の一人である」と始まる（『鷗外全集』第13巻、岩波書店、1972、p.436）。ゲーテとスピノザの間に思想的に密接な影響関係があるらしいということは、それこそ「ギョオテ」が「ゲーテ」になる以前から日本でも紹介されていたのである。



図6 『ギョオテ傳』
森鷗外 著（1913年 原本出版者 富山房）（国立図書館コレクション）
Kindle アーカイブ

（2）どういう意味で「スピノザ派」？

ところが、ではどういう意味でゲーテが「スピノザ派（Spinozist）」なのかというと、途端に話がぼんやりしてくる。鷗外が訳したビールショウスキーの記述も、煩瑣になるので細かな紹介は控えるが、盛りだくさんであるにも関わらず「こういうところが似ている」とい

う印象論で終わっている面が少なくない。そこはやはり、ゲーテ自身がテキストでどう言っているかを見ていく必要があると思う。

スピノザへの関心をうかがわせるゲーテのテキストについては、数ある先行研究がすべての点で一致しているわけではないが、それらに最大公約数的に準拠するならば、おおむね三つの時期に分かれているという理解で大過ない。

最初はまだ若いころの 1770 年代前半のことで、書簡と、それから同時代の記述ではないが、この時期のことを回想した後年の自伝『詩と真実』の第 14 章でスピノザについて触れている。これを 1 期とする。

次にスピノザが集中的に話題となるのは、1780 年代の書簡の中でのことである。これを 2 期とする。本日の考察の中心となるのはこの時期である。

ゲーテが大分歳をとった 1800 年代後半～1810 年代前半にも、書簡と、おそらく人に見せるつもりでなかった覚書と、この時期に成立した『詩と真実』の第 16 章にスピノザ論が出てくる。これを 3 期とする。

この中で 1 期の『詩と真実』の第 14 章、2 期の書簡、3 期の書簡と覚書は、いずれもヤコービとの交流から直接間接に派生したスピノザへの言及になる。逆に言えば、ヤコービとのやり取りなしには生まれなかったテキストなのである。

(3) テキストの引用が少ないのは…／各論ではなく総論寄りの議論だから？

これら三つの時期それぞれにスピノザへの言及が見られるが、スピノザの名前は出ていても、大半は具体的なスピノザのテキストに紐づけされない記述で終わっている。

なぜそのような書き方になったのか。理由はいろいろ考えられるが、大きな理由としては、今述べたように、こうした言及箇所のほとんどがヤコービのスピノザ論への直接間接の応答として成立したからではないだろうか。ヤコービに出した手紙の中で書いていれば直接の応答だし、「ヤコービがスピノザについてこう言っていたけれども、それはどうだろう」といったことをメモなどに書きつけていれば、それも間接的なヤコービへの応答である。

そのヤコービだが、どうやら要約の名手というか、他人の意見を「要するにこういうことだろう」というふうに言い換えるのが大变得意な人だったようである。私が自分で彼のテキストをいろいろと拾い読みしてもそう思うし、ゲーテ自身もはっきりそう言っている。たとえばヘルダーに宛てた 1783 年 12 月末のゲーテの手紙に「あの善きフリッツは、自分自身の見解よりもむしろ他の人たちの見解を、一見してそれと分かるようにしてみせる (anschaulich zu machen) のに長けていますね」という一節がある (FA29, 498=フランクフルト版ゲーテ全集第 II 部 2 巻=29 巻 498 ページ。ゲーテからの引用については、以下必要に応じてフランクフルト版の巻数およびページ数で典拠を示す。「フリッツ」とはフリードリヒの愛称、つまりフリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービのことである。この「善き」は「倫理的に善良な」という意味ではないと思うが、訳し方に困るのでひとまず「善き」でごまかしておく)。

まとめると、ゲーテのスピノザに関する言及というのは、ヤコービによってあらかじめ、しかもスピノザのいわゆる「幾何学的秩序」にこだわらない形で要約済み・整形済みのスピノザの思想（とされるもの）と、そこから生じてくるさまざまな帰結（というか、少なくともヤコービがそういうことが帰結してくると思っていること）に対して、その都度ゲーテがコメントを返すという形で成立した一連のテキストから成り立っている。つまり、まずヤコービが「スピノザ（スピノザ主義）とは、要するにこうだ」と大づかみにまとめたものを投げつけて、それに対してゲーテが「いやいや、むしろ要するにこうだろう」とこれまた大づかみに投げ返す。ほとんどがそういう総論をめぐるレベルの、くどいようだが大づかみなやり取りなのである。そうしたやり取りは、スピノザの具体的なテキストを引きつつ各論的に細かく議論するには最初から不向きなつくりになっているし、実際そういう議論はヤコービもゲーテもほとんどしていない。

（４）典拠を挙げて語っている希少な箇所

それでも、ゲーテがスピノザのテキストに個別的に言及している例が、私が見た限りでは2箇所ある。誤解のないように申し添えておくと、2箇所というのはゲーテのテキストの中に2箇所見つかるという意味ではなく、ゲーテがスピノザの『エチカ』の中の別々の2箇所に言及しているという意味である。

まず①『エチカ』第5部定理19の「神を愛する者は、神が自分を愛し返してくれるよう努めることができない」という一節が、ヘルダー宛ての1786年2月20日付けの手紙と、『詩と真実』14章で引用されている。この言及例については、引用文自体にも置かれた文脈にもいろいろと問題があるので、今回の考察からは除外したい（引用文自体の問題とは、ドイツ語の訳文で引用されている箇所とラテン語原文のままで引用されている箇所微妙に違った意味に読めてしまうので、その擦り合わせが厄介だという意味である。また置かれた文脈の問題とは、確かにこの引用は自然の研究者、自然の観察者としてのゲーテの態度に間接的には絡んでくるが、次に挙げる②ほど直接的に絡んでくるわけではない。したがって今回の考察から除外しても、お話しすることの大筋に影響は出ないと判断できる）。

これに対して、今回の考察の中心としたいのは②の引用である。この引用は『エチカ』第2部定理40の注解2から取られている。

「この種の認識は、神の何らかの属性の形相的本質についての十全な観念から、ものごとの本質についての十全な認識へ進むものである」という一節で、ヤコービに宛てた1786年5月5日の手紙に出てくる。簡単に補足すると、『エチカ』のこの箇所はスピノザが人間の「知」の種類、認識の種類を三つに区分しているところで、「この種の認識」と呼ばれているのは、その最後に出てくる「第3種の認識」と呼ばれるもののこと、言い換えれば「直観の知 *scientia intuitiva*」のことである。

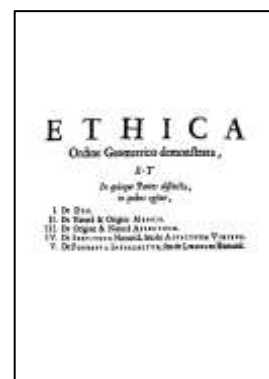


図7 『エチカ』スピノザ著 Public domain, via Wikimedia Commons

ここからの話の順序だが、まずはこの『エチカ』からの引用を含むヤコービ宛の手紙について、それが書かれた文脈をマクロ・ミクロ両面から明らかにしていきたい。その後、そこで話題になっている「この種の認識＝直観の知」が一体どういう「知」なのかについて、私なりの解釈をお伝えしたい。

ゲーテは『エチカ』のこの言葉を引用した直後に「この短い言葉はぼくに、ぼくの全生涯を事物の観察に捧げる勇気をくれる」とコメントしているから、考えられる限り最上級の共感を寄せた上での引用だったことが分かる。このコメントに込められたゲーテの真意については、文脈と内容についての考察を終えた後、本日の講演の締めくくりとして私自身の解釈をお話ししようと思う。

(5) 文脈の点検 ― マクロな観点から

それでは、まずはこのスピノザからの引用を含んでいる 1786 年 5 月 5 日のヤコービ宛書簡が置かれた文脈について、マクロ・ミクロ両方面から点検していく。

まずマクロな文脈としては、この書簡がいわゆる汎神論論争 (1785～) の中で書かれたものであることを見落とすわけにはいかない。汎神論論争とは、ドイツ前期啓蒙を代表する文豪であり評論家であったレッシング (Gotthold Ephraim Lessing: 1729-1781) が「じつは」最晩年にスピノザへの共感を語っていたという、そういう伝聞をめぐる始まった論争である。

このレッシングの言葉の聞き役だったヤコービが、レッシングの自他ともに認める親友であったモーゼス・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn: 1729-1786) に「レッシングが生前こういうことを言っていた」と人づての書簡で伝える。そのメンデルスゾーンはスピノザと同じユダヤ人で、ドイツ人社会でさまざまな嫌がらせや迫害にさらされながら、散々苦勞して地位と名声を確立した人物だった。したがって何か悪意がこもっているのではないかと疑えるような他人の挙動については非常に敏感で、このときのヤコービの報告についても「ヤコービがレッシングの名前を貶めたくてやっているのではないか」という疑いを最初から捨てきれなかった。もちろんメンデルスゾーンは亡き友人の評判を汚したくなかったの、やはり人づてに返信してこれに反論する。こうして書簡での回りくどい論争が勃発したわけである。つまり、レッシングはヤコービが言うように「スピノザ主義者だった」のか、それともメンデルスゾーンが言うように「必ずしもそう考える必要はない」のかという、それをめぐる意見交換がそもそもの発端である。



図 8 Gotthold Ephraim Lessing (1729-1781)
アントン・グラフ画、
Public domain,
via Wikimedia Commons



図9 Moses Mendelssohn (1729-1786) アントン・グラフ原画より、
Public domain,
via Wikimedia Commons

（６）論争の推移と拡大

この論争は、当初はレッシングという個人／故人に紐づけられたやり取りだったが、次第に議論のレベルが一般的なものになっていく。つまり「そもそも、ひとはどのような思想の持ち主だったらスピノザ主義者（Spinozist）と呼ぶことができるのか」というところに、そしてさらに一段上がって「そもそもスピノザの思想（本来の意味でのスピノザ主義）とはどのようなものだったのか」というところに、議論の中心が推移していくのである。

そうしているうちに、この２人の間で繰り広げられていた論争が、ついに世間に知られるときがくる。1785年８～９月にかけて、メンデルスゾーンは『朝の時間』、ヤコービは『スピノザの思想に関するメンデルスゾーン氏に宛てた書簡』、通称『スピノザ書簡』をほぼ同時に刊行し、この論争はいわば「野に放たれる」ことになったのである。どちらが先に刊行したかについては面倒なことが言われている。かつてはヤコービがメンデルスゾーンより先に、だまし討ち的に二人の間のやり取りを刊行したなどという陰謀説めいたことが唱えられていたが、これは明らかに時系列に反するので認められない。そもそもこの時代の書物というのは、今と違って発売日とされた何月何日びつたり本屋の店頭には並ぶとか Amazon からダウンロードできるとか、そういうものではなかったもので、どちらが先だったかという問題にこだわりすぎるのは危険だと私は思う。

論争が野に放たれて間もなく、翌 1786 年の 1 月には、一方の当事者のメンデルスゾーンが亡くなってしまいが、彼はただでは死なずに『レッシングの友人たちへ』という、この論争にコミットした作品を遺した。それに対してヤコービはどうしたかという、相手が死んでしまったからもう黙っていようとか、そういう空気を読むような人ではなかった、このメンデルスゾーンの遺作にも律儀に反論して、4 月に『メンデルスゾーンの非難に抗して』という 120 頁ほどのパンフレットを刊行した。

（７）文脈の点検 ― ミクロな観点から

この間、ゲーテは何をしていたのか。これがミクロな文脈になるわけだが、1783 年 12 月から、前述の『エチカ』第 2 部からの引用を含む 1786 年 5 月 5 日のヤコービ宛書簡に至るまでの間、ゲーテはヘルダーやヤコービと交わした書簡の中でしばしばスピノザに言及している。

したがって、5 月 5 日のヤコービ宛書簡はそうした関連するやり取りの最後を飾るものになっている。さらに具体的に何を問題にしているかという、ゲーテはヤコービから前述の『メンデルスゾーンの非難に抗して』というパンフレットを刊行直後に送られて読んでおり、この手紙はこのパンフレットの内容に対するかなり徹底的なダメ出しでできている。いろいろとダメ出しを重ねて、最後の最後に『エチカ』から、「直観の知」についてのスピノザの言葉が引用されるわけである。

このダメ出しがとてもおもしろいので、以下少し細かく見ていきたい (FA29, 627-629)。

(8) ゲーテのダメ出し

① 論争への嫌悪

手紙の冒頭の部分はこう始まる。まずゲーテは、ヤコービが送ってきたこの『メンデルスゾーンの非難に抗して』というパンフレットが、そもそも論争のために書かれた著作であるということに、強い嫌悪感を抱いているのが分かる。

「きみの小著は関心をもって読ませてもらったが、喜びは得られなかった。あれは論争目的の著作、一つの哲学的著作であり、どこまでもそういうものでしかない。言葉を使ったありとあらゆる争いごとを、ぼくは嫌悪している。どれほど嫌いって、ラファエロがそういう争いの一つを絵画にしたり、シェイクスピアが芝居にしたりすることがありえたとしても、ぼくはそこで言われるあらゆることにほとんど楽しみを感じられないだろう」

ちなみに、ゲーテはヤコービとは終始「Du」でやり取りしている。その親密さ、遠慮のなさを表現するために、以下でお届けする手紙の訳文（すべて拙訳）では敢えて「きみ」と「ぼく」で訳し通してある。ゲーテに「ぼく」とか子供っぽい一人称を当てることに不満をお持ちの方がおられたら申し訳ないが、ご理解いただければと思う。

② 論述技法への懷疑

ダメ出しはさらに続いて、ヤコービの文章作法、スタイルにもおよぶ。

「きみはこの原稿を書かないわけにいかなかったんだろう。それは分かるし、ぼくは期待してもいた。ただ、冒頭陳述（species facti）はもっとシンプルにやってほしかった。そこに感情的な要素が盛り込まれているのも気になって仕方ないし、そもそも勝ちを争うなら装飾やら付録やらをごちゃごちゃ付けているのも得策ではない。簡潔であればあるほどいいんだ」

この後の部分でも話題になるが、ヤコービの文章は独特の回りくどい諧謔にあふれていて、読み慣れないうちはひたすら「ごちゃごちゃ」しているようにしか見えず、真意がどこにどう書かれているのか非常につかみづらい。ヤコービと長年付き合ったゲーテでさえそう思っていたようで、そもそも論争の書であるはずなのに、本気で「勝ちを争う」つもりがあるのかどうか疑わしくなるほど「気になって」仕方なかったらしい。

なお「species facti」は法廷用語で、これから裁判の中で事実（factum）として争うものを自分自身はどう見ているか（specio「見る、眺める」⇒species「見え方、観点」）、原告被告それぞれが述べていくパートを意味する。ここでは仮に「冒頭陳述」と訳しておく。

③ 諧謔趣味への警告

さらにダメ出しは続く。ここもヤコービの書きぶり、スタイルへのダメ出しで、いくらな

んでも諧謔が度を超えているという。

「それから貴兄の前だが、正直に言わせてもらおうと、あのダチョウの卵は全くもって気に入らない。言葉や語りで済ませるならまだよかったかもしれないが、[ダチョウと卵の描かれた挿絵が]後ろにまるで印章のように印刷されているのだから。論敵たちに少しでも知恵があれば、限りない自己満足に浸りつつ繁みから覗き見し、カササギやカラスたちに対する自分の優越を陰から喜んでいる、この首の長い作者を狩り立てにかかるだろう。そして彼らは全公衆を味方になることになる。(…中略…) 自尊心を他の人たちへの軽蔑という形で示してしまえば、たとえ軽蔑の対象とされているのが取るに足らない人たちであろうとも、世間の不興をこうむるはずだ」

いきなり「ダチョウの卵」という訳の分からない言葉が出てきて面食らう方が多いと思うが、これはそういう挿絵が『メンデルスゾーンの非難に抗して』の末尾に置かれているのである。世の中は大変便利になったもので、ヤコービのこの本はすでに著作権フリーになっていることから、Google Books 等で検索するとこの挿絵の実物を見ることができる。それがこれである。分かりやすいように該当する部分をそれぞれ赤色で囲ったが、前方に小鳥たちが持て余し気味にダチョウの卵の周囲に集まっていて、そしてその背後の繁みに、そう、何かいる。この卵を産んだと思いきダチョウである。持て余されているダチョウの卵は『スピノザ書簡』を表し、そして「限りない自己満足に浸りつつ、繁みから覗き見し、カササギや



図 10 Jacobi, Friedrich Heinrich: *Wider Mendelssohns Beschuldigungen betreffend die Briefe über die Lehre des Spinoza*. Leipzig (Göschen), 1786. S. 127.

カラスたちに対する自分の優越を陰から喜んでいるこの首の長い作者」、このダチョウがヤコービを表している。と、少なくとも大多数の読者はそう理解するだろう。このように相手を馬鹿にしているような形で本を終えてしまうというのは、先ほど「勝ちを争う」という言い回しも出てきたが、戦略的にも拙いだろうとゲーテは指摘したいようである。「自尊心を他の人たちへの軽蔑という形で示してしまえば、たとえ軽蔑の対象とされているのが取るに足らない人であろうとも、世間の不興をこうむる」。つまり、味方になってくれるはずの人さえ敵に回してしまうと言いたいらしい。

(9) 形而上学か自然学か

いよいよダメ出しも佳境に入る。間を少し省略してあるが、この部分は「きみ(ヤコービ)の子どもたちが順調に育って何よりだ」とか「きみはそもそも大きな家屋敷とか財産とか温かい家庭とか、普通の人なら羨むようなものにたくさん恵まれている」などの言葉が並んでいる。それで、その代わりと言っては何だけれど…という感じで以下につながる。つまり、たくさんのものに囲まれているきみ(ヤコービ)だけど、ぼく(ゲーテ)から見たらあまりありがたくないというか、厄介なものにも恵まれているようだ、という文脈である。その「厄介なもの」とは何か。

「(…中略…) 神はきみを形而上学病 (Metaphisick) で罰し、きみの肉体に杭を打ち込んだ。それに対しぼくの方は自然学病 (Phisick) で祝福してくれた。このためぼくは、神のさまざまな作品を見ると (Anschauen) 快い気分になる。そうした作品のうち、神はわずかしかなるぼくに与えようとしてくれないけどね」

ここですでに「直観する」とも訳せる Anschauen という言葉が使われているが、これはこの後スピノザの「直観の知」に関する言葉を引用するための先触れというか、呼び水になっているようである。

では、わざわざ「形而上学病」「自然学病」と病の字を付けて訳出したのはなぜなのか。「Metaphisick」も「Phisick」も綴りがおかしいのだが(現代ドイツ語ではそれぞれ「Metaphysik」「Physik」が一般的)、18世紀後半のこの時代、ドイツ語の正書表記法はまだ確立されておらず、地域や個人によってかなり偏差があったので、そういう偏差の枠内で許されていた変則的な綴り方という可能性もゼロではない。しかし念のため、ドイツのトリアー大学がインターネット上で公開しているゲーテ辞典(<http://gwb.uni-trier.de/de/>)で調べてみたところ、ゲーテが「形而上学」「自然学」という単語を変な形に綴っている箇所はここ以外には見当たらなかった。だとすると、ゲーテは意図的にこの箇所だけでこう綴った可能性が高い。それは一体なぜか。

私見だが、おそらく「お前はふざけ過ぎだ」とヤコービを直前でたしなめていながら、ゲーテもここでふざけているのだと思う。ゲーテもヤコービもそうだが、特にヤコービは英語に堪能だった。そして周知の通り、英語で「sick」は「病んでいる」を意味する。つまりゲーテは「ヤコービ、超自然的なものへの関心に執着するのを止められないきみは、形而上学で病んでいる。つまりメタフィ sick だ。そしてそれはきみの肉体に神から打ち込まれた杭というか、呪いみたいなものなのだ」としゃれているのである。

ゲーテの諧謔はさらに続く。自分はどうかということ、超自然的なものよりもむしろ自然の事物に関心を張りつかせないではいられない。これも一つの病気かもしれない。つまり「フィ sick」である。形而上学で病んでいる「メタフィ sick」なヤコービに対し、自然学で病んでいる「フィ sick」なゲーテ。ただしゲーテは、自分の病いの方はヤコービのような呪

いじみたものではなく、自分にとってはむしろ祝福に他ならないとも断っている。この祝福があるからこそ、彼は「神のさまざまな作品」つまり自然のさまざまな事物に関心を寄せ、これを「見る＝直観する」ことを「快い (wohl)」と感じられる人になったからである。

(10) 「直観／見ること」に話題が収斂し…

こうして「見ること＝直観すること」に話題が収斂していき、いよいよスピノザの言葉が引用される。先ほど紹介した時は細かく区切っていたが、全体をつかむためにまず全文を以下に示しておく。

「(…中略…) ひとは神を信じることしかできない (p.101)、ときみは言うのだね。それならきみにこう言おう。ぼくは見ること (schauen) に重きを置いているのだ、と。そしてスピノザが直観の知について語り、『この種の認識は、神の何らかの属性の形相的本質についての十全な観念から、ものごとの本質についての十全な認識へ進むものである』と言う時、この短い言葉はぼくに、ぼくの全生涯を事物の観察に捧げる勇気をくれるのだ。ぼくに届きうる限りの、そしてその形相的本質についてぼくが何らかの十全な観念を形成できると望みうる限りの、一切の事物の観察に捧げる勇気を。ぼくがどこまで進んで行けるか、そしてぼくに[進んだその先で]何があてがわれるか、少しも気にすることなく」
(下線部原文イタリック。() 内は『メンデルスゾーンの非難に抗して』の該当ページ)

先ほどもふれた「ぼくの全生涯を事物の観察に捧げる勇気」の後に長い関係節が入っていて訳しづらくなっているが、ここは後で非常に重要になってくる箇所なので、敢えて略さずに全訳する。直観の知について語られたスピノザの「短い言葉」から、ゲーテは「ぼくの全生涯を事物の観察に捧げる勇気」を、さらに詳しく言えば「ぼくに届きうる限りの、そしてその形相的本質についてぼくが何らかの十全な観念を形成できると望みうる限りの、一切の事物の観察に捧げる勇気」をもらったと言っているのである。

(11) 引用の文脈は判明したが…／この先の方針

マクロ・ミクロ両方の文脈からこの引用をふくむ手紙について検証してきたが、まだ解明しなければならないことが二つほど残っている。

一つは、①スピノザの「この種の認識＝直観の知」とは具体的にどういう知、どういう認識なのかということである。これは後段でお話する (III)。

もう一つは、②ゲーテはスピノザのこの「直観の知」をどこまで正しく理解していたのかということである。この2番目の疑問については問いを変形させて「②『もしゲーテがスピノザを正しく理解していたとしたら、なぜ彼はスピノザの『直観の知』から『全生涯を事物の観察に捧げる勇気』をもらったのか？そしてそれはどういう『勇気』であったのか？』という形にして対応していきたい。これは少し間が空くが「おわりに」でお話することになる (IV)。

(12) ①を解明するにあたり…

では、スピノザによって「神の何らかの属性の形相的本質についての十全な観念から、ものごとの本質についての十全な認識へ進むもの」とされている「直観の知」とは、具体的にどういう知、どういう認識なのだろうか。ただちにその説明に取りかかりたいところだが、そうもいかない。この引用文には、スムーズな理解を妨げる専門用語が二つ使われているからである。「属性 (attributum)」と「形相的本質 (essentia formalis)」がそれだ。後者はスコラ哲学以来の用語法であり、比較的簡単な説明で済ませられるので後回しにして、ここからは属性についての説明に移りたい (II)。

II 属性概念の重要性

(1) 事物＝個物

スピノザを引用しつつ「全生涯を事物の観察に捧げる勇気」について語った 1786 年 5 月 5 日の書簡より 11 ヶ月ほど前のことになるが、ゲーテは同じヤコービ宛の手紙でこんなことを語っている (FA29, 583)。

「悪いけど、神的なもの (ein göttliches Wesen) が話題になるならばくは発言を控えさせてほしい。そういうものを、ぼくはさまざまな個物 (res singulares) の中にしか認められないし、個物からしか認知できない。個物をいっそう詳しく、いっそう深く観察することを、スピノザ以上に鼓舞してくれる人物はいない。たとえ彼のまなざしの前には、あらゆる個物が消えてしまうように見えるとしても」(1785 年 6 月 9 日)

最後の「あらゆる個物が消えてしまうように見える」という言葉はスピノザ研究者として非常に気になるが(ドイツ語圏では古来おなじみの、そして私が根本的におかしいと考えているスピノザ批判の典型的表現なので)、ここをつつくと本筋から離れてしまうため本日は不問とする。あくまで自然を超えたところに「神的なもの」を求めるヤコービ(メタフィ sick!) に対して、ゲーテは自然の中、さまざまな個物の中に「そういうもの」つまり神的なものを認めようとする(フィ sick!)。前述の手紙の中にも出てきた両者の根本的な方向性の違いがここにも表れているが、このゲーテの「個物の観察」に向かう方向性を鼓舞してくれるのも、やはりスピノザなのだという。したがって、ゲーテに「全生涯を事物の観察に捧げる勇気」をくれたスピノザは、少し違った言い方をすれば、「個物を一層詳しく、一層深く観察することを鼓舞してくれる」人物でもあったことになる(いずれも下線部強調/吉田)。事物の観察とは、個物の観察なのである。

(2) ここでも「属性」が登場 — 属性は説明が難しい

スピノザの『エチカ』では、個物は以下のように説明されている。

「個々のもの（res particulares）は神のさまざまな属性の変容した姿、つまり様態にほかならない。これらの様態は、神のさまざまな属性を、ある決まった仕方で表現しているのである」（第1部定理25、下線部強調/吉田）

ここでも「属性」という言葉が入っている。近世哲学を専門としない人にスピノザの哲学の概略を伝えようとするとき、じつは一番困るのが「属性」の扱いである。はっきり言えば、この言葉は抜いて説明したほうが格段に分かりやすくなる。冒頭で紹介させていただいた拙著『スピノザー人間の自由の哲学』でも、ある程度理解が進むまではこの言葉を出さずに説明している。

（3）実体とは…

スピノザにおける神（実体）と個物（様態）の関係を、属性抜きで説明するとどうなるか。以下『人間の自由の哲学』（p. 258 以下）に準拠して話してみる。

伝統的な形而上学の用語としては、実体（substantia）とは「さまざまな変化がその上で起きるけれども、それ自体は同一に止まるもの」である。これに対して様態（modus）とは「実体が時と場合に応じてとるさまざまなあり方」を指す。

この普通の用語法にしたがうなら、たとえば「うちにいる猫」は実体である。もともと「黒い毛並み」というあり方（様態）をしていたのが、年を取って「白い毛が混じってくる」という別のあり方（様態）を取るようになったとしても、昔からうちにいる同じ猫（実体）であることに変わりはない。

（4）しかしスピノザは…

しかし、スピノザはそういう言葉遣いをしない。彼は言葉を厳密に使うため、こういう定義を設ける。

「実体とは、自分自身の内にあって、自分自身を通して考えられるもののことだと理解する」（第1部定義3、下線部原文イタリック）

これを逆に言えば、「実体」というのは定義上、存在したり認識されたりするのに自分以外の別の何かを必要としないもののことである。スピノザの用語に直すなら「自分が自分の原因であるもの（自己原因 causa sui）」ということになる（第1部定義1）。

この「実体＝自己原因」という定義を厳密に受け取るならば「神以外にどのような実体もありえないし、考えられない」（第1部定理14）とスピノザは言う。この世界を成り立たせている「実体」は一つきりであり、その一つきりの実体をスピノザは「神」と呼ぶのである。したがって、猫は実体ではない。

実体でなければ一体何なんだと言いたくなるかもしれないが、スピノザ的な説明では、猫という個物は実体ではなく、実体がとるさまざまなあり方の一つ、つまり「様態」ということになる。神という実体が、ある時空的位置において猫というあり方をとって、つまり猫という様態として存在している。それが猫なのである。

もう定訳になってしまっているので様態という言葉を使わざるをえないのだが、この「様態」は、たとえば固定電話が通話モードになったり、留守電モードになったり、fax モードになったりするというときの、あの「モード」という訳を付けたほうがピンとくるかもしれない。何が言いたいかというと、つまり、猫は猫モードになった神、猫モードの神なのであり、その猫モードの神が、あるときには「縁側で寝ころんでいるモードの猫モードの神」になったり、またあるときには「屋根の上を散歩しているモードの猫モードの神」になったりするのである。

猫ばかりではない。この会場にある机も机モードの神、私の話を聴いている皆さん一人ひとりも一人ひとりの人間という形にモードをとった神、そして皆さんによく分からないことを話しているこの吉田も吉田モードの神ということになる。このようにあらゆる個物は、それぞれの個物というモード（様態）になった神として、実体である神の様態として存在しているとスピノザは考える。

あらゆる個物が神として、正確には神の様態として存在しているというこのスピノザの世界観を、ゲーテはよく分かっていたし、ただ分かっていただけでなく少なからぬ共感を寄せていたと思われる。それは前述の同じ手紙の中で、こんなことを述べているからである。

「彼[＝スピノザ]は神の存在（Dasein）を証明しているのではない。[スピノザからすれば]存在が神なのです」（1785 年 6 月 9 日、ヤコービ宛、[]内は吉田の補足）

（５）属性抜きの説明に足りないもの

このように、実体と様態の関係を属性抜きで説明しても分かるし、むしろそのほうが分かりやすい。しかし、実際にはスピノザは個物をいつでも「神のさまざまな属性の様態」と属性を入れて表現するのにこだわっていて、ゲーテも引用の中でこれを踏襲している。ここまでこだわるからには、そのこだわりには恐らく意味があると考えられる。

それでは、属性抜きの説明では何が足りなくなってしまうのだろうか。逆にいえば、属性を入れて説明することによって何が足されるのだろうか。そこにこだわりながら考察を進めていきたい。

（６）属性とは？

そもそもスピノザの言う「属性」とはどういうものなのか。『エチカ』にはこう書かれている。

「属性とは、実体の本質を構成している、と知性がとらえるもののことだと理解する」(第1部定義4、下線部原文イタリック)

ここでは特に「知性がとらえるもの」というくだりに注目する必要がある。繰り返しになるが、スピノザにおいて実体は一つきりであり「神以外にどのような実体もありえない」。そういう一つきりの存在である実体を知性がとらえようとしたときに、その本質として浮かんでくるのが「属性」なのである。神的な実体が知性との相関なしにあらかじめ何らかの属性＝本質をもっていて、それを知性が後からとらえる(ちなみにすぐ後で述べるように、これがデカルトの考え方である)という、そういう順序にはなっていない。逆である。そもそも知性のはたらきがあることを前提に、そのはたらきと相関的に定義されないと意味をもちえないのがスピノザの属性概念なのである。

具体的には、私たち人間の知性は神という実体を二つの「属性」のもとでとらえることができる。スピノザは言う。一つは「思考 (cogitatio)」。仏教用語を転用して「思惟」と訳されることもあるが、ここでは思考で通す。そしてもう一つは「延長 (extensio)」である。延長というと巨人・阪神戦が9回で終わらずに延長戦に突入するとか、サッカーの試合が延長Vゴール方式になるとか、そういう「延長」を思い浮かべがちだが、これはそういうものではなく、ものが三次元空間内に広がり (extensio) をもって存在するというあり方を指している。そのまま「広がり」とでも訳したほうがこなれた訳になると思うが、これももう定訳になってしまっているため、ここでは延長で通す。

このうち、本論の流れで圧倒的に重要なのは、延長属性の方である。というのもスピノザ哲学の画期的な性格は、神＝実体が「思考」だけではなく「延長」という属性をもつとしたことにこそ、つまり私たちの知性は「思考」だけでなく「延長」も神＝実体の本質を構成するものとしてとらえると喝破したことにこそ存するという、そういう指摘があるからである。

どうしてそれが画期的なのか。スピノザの直接の先行者であるデカルトのとらえ方と比べてみると分かりやすいと思うので、以下 20 世紀ドイツの哲学者ロムバッハ (Heinrich Rombach: 1923-2004) の議論に依拠しつつ両者を比較してみたい (Vgl. Rombach, Heinrich: *Substanz, System, Struktur*. München (Karl Alber), 2010 (1. Auflage 1966). Kap. 5)。

(7) デカルトにおける実体と属性

デカルトの思考法では、実体の「本質」が「存在」に先行する。何やら実存主義全盛期によく使われた決まり文句を思わせるような言い方だが、つまりそれが何であるかという「本質」が決まって初めて、その何かは何らかの実体として存在しうるわけであり、本質が決まらないうちはそもそも存在できないというのである。

そして、デカルトにおいてもスピノザと同様、「属性」とは知性が実体の本質としてとらえるもののこと(ただしこの「属性＝本質」は、デカルトの場合、知性のはたらきがそれに向けられる以前に決まっているものとされる)なので、属性の違いは本質の違いに、そして

本質の違いは実体の違いに直結する。その結果、「属性」が違ふとされるもの同士は本質的に違ふものであり、したがってまた実体としても別々の存在ということになる。

(8) デカルトにおける精神と物体（身体）

何が言いたいかというと、つまり思考属性をもつ実体である「精神」と、延長属性をもつ実体である「物体（身体）」とは根本的に別々の存在だという、デカルトの悪名高い(?)物心二元論的世界観がここから帰結するということである。このような図式の下では、同じ一つの実体にまるで違ふ属性が同時並行的に帰属して、同じものが思考という観点からも延長という観点からも、つまり精神的な観点からも物質的な観点からもとらえられるという、そういうスピノザ的な思考を繰り広げる可能性は最初から排除されてしまう。あらゆるものが思考的存在であるか物質的存在であるか、あるいは同じことだが、思考属性をもつ実体すなわち精神であるか延長属性をもつ実体すなわち物体（身体）であるか、必ずそのどちらかでなければならなくなるのである。

この二者択一的図式で考えた場合、デカルトにとって少し酷な言い方になるかもしれないが、私たちは何かいろいろと雑に割り切ることを余儀なくされる。神と猫と、それから人間で考えてみよう。

まず、神という実体は、精神であるか物体であるかのどちらかである。それで、まさか神が物体であるはずがないから、神は純粋に精神だけの存在ということになる。雑な割り切りである。

次に猫という実体も、精神であるか物体であるかのどちらかである。それで、まさか猫ごときに精神があるはずがないから、猫は物体だけの存在、魂をもたない自動機械ということになる。これも、雑な割り切りである。

最後に、デカルトは人間の場合だけ、雑に割り切りきれなくて少しずるいことをする。人間は、一方で究極的には精神なのか身体なのかというと、明らかに精神である。有名な方法的懐疑によって析出された「考える私(コギト)」、つまり精神としての私のほうがあくまで本体なのである。その一方で、こうした精神としての私は、少なくとも現世を生きている間は、延長属性をもつ私の身体と特権的な仕方で結びつきながら存在する。つまり根本的に属性の異なる魂と肉体、精神と身体という、二つの実体の奇妙な複合体として存在しているのが人間存在ということになる。



図 11 René Descartes
(1596-1650) フランス・
ハルス原画より、
Public domain,
via Wikimedia Commons

(9) スピノザの同一実体・複数属性論

これに対してスピノザの思考法では、逆に、これも何か実存哲学じみた言い方になってしまいが、実体の「存在」がその「本質＝属性」に先行する。つまり、少なくとも実体＝神に

ついては何かがまずあって、それを知性が認識するときどういう属性のもとでとらえられるのかという順序になる。

こういう考え方のもとでは、知性が認識しにやって来るまで、属性は存在の中に、神の中に、実体の中に、いわば埋もれていることになる。しかもスピノザに言わせると、異なる属性同士は互いに接点をまったくもたないからこそ、互いが互いを参照し合ったり互いに言及し合ったりすることなく存在しうるし、認識されうる。だとすると同じ一つの実体が、つまり神が、複数の属性を備えていて全然おかしくないことになる。そしてこれこそスピノザが『エチカ』の冒頭部分（第1部定理1～15）で証明してみせようとする事なのである。

(10) 神すなわち物体？

その結果、どうなるか。

「思考は神の属性である。言いかえれば、神は考えるものである」（第2部定理1）

これは別におかしくない当時の読者は思っただろう。だが、こうするとどうか。

「延長は神の属性である。言いかえれば、神は延長しているものである」（第2部定理2）

延長しているもの（*res extensa*）であるということは、神は物体で（も）あると言っているように聞こえる。物体はしょせん被造物であり、造物主としての神とは似ても似つかない存在だどごく自然に教わっていた同時代の人たちにとっては、かなり衝撃的な主張であったに違いない。

神それ自体を一つの物体と呼べるかどうかはともかく、スピノザの神は延長しているもので（も）ある。そしてこの世界に存在する無数の物体、物理的存在者、物理的な諸現象は、すべて延長属性のもとでとらえられた神の何らかの様態、あり方を表わしているということになる。この考え方を採用しない場合、そうした物質的存在者の存在を説明するには、一種のイデア論を持ち出してくるしかなくなってしまう。つまり、それが何であるかという本質が神の知性の中かどこかにまずあって、それが神の胸先三寸で現実世界に物質的に形をとったりとらなかつたりするという、いわば精神の世界の物質の世界に対する優位を認め、前者から後者への存在論的な越境を想定することでしか説明できなくなってしまうのである。しかし、スピノザの考え方にしたがうならそうはならないし、そう考える必要もない。物質的な存在者も延長属性の神の様態として、延長の世界としての神自身に備わった必然的な法則にしたがって存在していると考えればよいのである。

(11) 延長の世界が格上げされる

これによって何が起きるかという、延長の世界が格上げされることになる。それまで本

質というアイデアの影みたいなものとしてかろうじてその存在を認められていた自然の世界＝物質の世界＝延長属性の世界が、今度は必然性をもって存在する世界、つまりそれ自身の法則において因果的に自己完結した世界として認知されることになるからである。

スピノザは、属性それぞれの自己完結性・自立性を次のような言葉で表現している。

「一つの実体に属するさまざまな属性は、そのどれもが、それ自身によって考えられなければならない」(第1部定理10)

それ自身によって考えられなければならないというのは、ある属性の世界で起きることを説明するために別の属性の世界のことで持ち出してはならないし、そもそもそんな必要はないということである。本日の文脈に即して表現するなら、延長という属性の世界、つまり物質的・物理的な自然の世界で起きることを理解し説明するためには、あるがままの自然の世界だけ見ていればそれでよく、そこで思考という属性の世界のことを、たとえば自然の法則を時に維持したり時にねじ曲げたりする神の意志のことなどを変に気にしてはならないし、気にする必要もないということである。スピノザの神は精神の世界から物体の世界に決して越境してこない。そういう越境が成り立つには、神が普段は精神の世界、思考属性の世界だけに暮らしていて、普段暮らしていない延長属性の世界にも時折気まぐれに顔を出して奇跡やら何やらを起こすと考える必要があるが、スピノザの神はそういう悪質な不在地主のような神ではないのである。越境するまでもなく、スピノザの神はいつもすでに同時並行的に両方の世界にまたがって存在している。というより、そもそも両方の世界を二つの別々の世界と数えるのが問題なのであり、むしろ同じ一つの神＝実体＝世界が、二つの異なる属性の下にとらえられているにすぎないのである。

またデカルトとの比較になるが、デカルトの神はいつでも越境できるけれども、越境しないように自分の意志で止めている神である。自然の法則をねじ曲げること(奇跡)はおろか、もっとひどいこと、たとえば $1 + 1 = 2$ でなくすことも、やろうと思えばできる。しかしやらないように自分の意志で止めている。これがデカルトの神である。したがって、 $1 + 1 = 2$ のように普通は永遠に変わらないと思われるような数学的な真理も「神様がそんなふうでこの世界を創ったから、そして今のところ変える気がなくて、そのままにしておいてくれるから真理であり続けていられる」ということになる。これがデカルトの、やはりあまり評判の良くない「永遠真理創造説」である。

スピノザによるこの延長の世界の格上げは、延長を神＝実体の属性としてとらえ直すという、大胆きわまる概念変更によって行われたわけだが、これはまさに『エチカ』が書かれた17世紀、トーマス・クーンのいう科学革命を経験しつつあった時代の意識を、鋭く先取りするような概念変更であったと思われる。たとえ『エチカ』をふくむスピノザの『遺稿集(Opera posthuma, 1677)』が刊行後まもなく禁書化されアクセス困難となり、そのメッセージに含まれた概念的起爆力が、その後しばらくは潜在的なものに止まらざるをえなかつ

たとしても。

前述のロムバッハもこう指摘している。

「近代的意識の勃興に伴い、延長と物質は（…中略…）存在者の本質的規定となった。そう
なった以上、神は延長しているものでもあると考えない限り、神という存在の万象網羅性
を維持することはもう不可能だった」（Rombach, ibid. Bd.2, S.28.下線部原文イタリック）

延長の世界、自然の世界を精神の世界、イデア的本質の世界の単なる影のようなものと見
なしている限り、ひとは自然そのものよりも、自然の背後にいてこれを操作しているとされ
る神の意志に目を向けがちになる。これを徐々にやらなくなっていくのが「近代的意識」
であり、そこでは自然の世界そのものが「延長しているものでもある神」の力の（意志では
なく！）表れとして、いわば真剣に眺められることになる。自然現象を「神のさまざまな作
品」と言い換え、これを「見ると（Anschauung）快い気分になる」と述べたゲーテの自然に
対する目線も、こうした近代的意識の延長線上に生まれたことは論をまたない。そしてその
原点（に、少なくともとても近いであろう所）には、スピノザがいるのである。

このように属性、とくに延長という属性が果たしている重要な役割について理解が進ん
だところで、いよいよスピノザの言う「直観の知」の話に入る。

III 直観の知はどういう知なのか

（1）あらためて、最初の問いへ…

あらためて最初の問いに戻るが、「神の何らかの属性の形相的本質についての十全な観念
から、ものごとの本質についての十全な認識へ進む」認識とはどういうものなのか。

まず指摘しておかなければならないのは、「何らかの属性」と言われているが、前述の 1786
年 5 月 5 日の手紙の中でスピノザのテキストを引用する際、ゲーテの念頭にあったのは明
らかに思考属性ではなく、延長属性だったであろうということである。

その延長属性の「形相的本質 (essentia formalis)」とは何か。形相的と訳されている
「formalis」は形を意味するラテン語の「forma」、英語の「form」に当たる「forma」からき
た言葉で、それを認識している人がいるかいないかに関わりなくいつもすでに働いていて、
そのものを形づくっている本質のことである。延長属性ならば延長、つまり時空的な広がり
をもつというあり方そのものを指す。

これが知性によって認識された場合、客観的、つまり傍から眺められている限りの本質と
いうことで「客観的本質 (essentia objectiva)」と言う。スコラ哲学の用語だが、現代の私た
ちの言語感覚からすると少し意味がねじれている。つまり、私たちは逆に形相的本質、フォ
ーマルな本質というと頭の中にある形のように感じ、客観的本質というと私たちの認識の
歪みやずれに関係なく決まったあり方のように感じる。しかしそうではなく、ここでは逆に

理解しなければならない。そのため、岩波文庫の訳を作られた畠中尚志氏は「essentia objectiva」に「想念的本質」という言葉をわざわざ作って当てているくらいである。重要なので繰り返すと、「形相的本質」はそのものを形づくっている本質ということになる。

(2) なぜ「直観の知」なのか

それではこの『エチカ』第2部定理40注解2は、どのように理解するのが正解か。私なりに言い換えると「自然界のさまざまな対象を、それらの『ものごと』が本質的には『延長属性のもとで理解された神』の何らかの様態であると認識すること」、これがスピノザの言う「直観の知」である。ここは研究者間でも解釈が分かれているところだが、少なくとも私はこのように理解している。

もちろん「直観」という言葉を一般にゲーテ自身がどう用いていたかということは、これはこれで別に考えなければならない難しい問題である。しかし、少なくとも『エチカ』のこの箇所で行われている「直観の知」を、もし誤解していなければ、ゲーテもまたこのように理解していただろうと思われる。

これがなぜ「直観の (intuitiva) 知」と呼ばれているのか、今一つ理解できない人もいるかもしれないが、目の前で観察している対象について具体的に細かいところがまだ分かっていなくても、目の前のそれが延長属性の神の様態であるということは、細かいところを見なくても「直ちに (uno intuitu)」分かってしまうから「直観の知」なのである。

この「直ちに分かる」というところが、まだ理解し難いという方は多いだろう。私も長い間そう感じる人間の一人だった。これについて、スピノザは『エチカ』の同じ箇所の一つの例を持ち出しているので、その例を見ていきたい。先に述べておくと、この例を見たから「理解できた」という方はあまり出ないのではないかと思う。私もそうだった。

(3) 比例数の例

直観の知（も含む、3種類の認識の区分）を説明するために、スピノザの出した例は以下のとおりである。

(問題) 4つの数の間に $a:b=c:x$ という関係が成立しているとき、 a 、 b 、 c それぞれの値が判明しているとして、残る x の値を求めるにはどうしたらよいか。

もちろん、内側の項 b 、 c を掛け合わせてこれを a で割れば、未知数 x は簡単に割り出せる。つまり $x=bc/a$ という計算を行えばよいのである。しかし、なぜその計算で割り出せるのか。これを原理的にきちんと説明できるかどうかで、第1種の認識(表象の知 imaginatio)と第2種の認識(理性の知 ratio)が分けられる。つまり「親(あるいは先生)にそう解けと言われたから」「いつもこうやって解いているから」としか説明できなければ、出した答えは正しくてもそれは「表象の知」の域を出ず、数学的な裏付けをきちんと理解できていて初

めて「理性の知」ということになる。

これに対し、とスピノザは続ける。もし3つが簡単な値で、たとえば $1:2=3:x$ の場合は、わざわざ計算するまでもなく $x=6$ と直ちに分かるだろう。それが第3種の認識＝直観の知だと言うのである。証明終わり。えっ、これで終わり？

この説明を最初に読んだ人は「つまらない」「それが一体何なのか」と不満を覚えると思う。私も正直不満だった。これは九九を覚えている子どもなら脊髓反射的に割り出せるようなことでしかなく、何がどう重要なのか全然分からない。

(4) $x=6$ であることの(非)重要性

はっきり言うてしまうが、これはまずい例である。どうまずいのかというと、ことさらに簡単な数を当てはめて説明したために、読み手が受ける「直観の知」なるものの印象が陳腐化してしまうし、その重要性も隠蔽されてしまうのである。

そこで、ここからは敢えて批判的に読み解いていく。 $x=6$ という解が「直ちに分かる」とスピノザは言うけれども、実は $x=6$ と直ちに分かることはそれほど重要ではないのではなかろうか。ここはむしろ真逆の例を作ってみて、それで考えてみるほうが分かりやすいと思う。

真逆の例というのは、たとえば「 $31:17=365:x$ 」のような難しい数のケース、少し時間をかけて計算してみなければ割り出せないような場合である。脳内に算盤を常駐させている珠算検定上級者でもない限り、この問題を見てすぐに答えをはじき出すことはできない。しかし、 x の値が一見しただけでは出せないようなこうした場合でも、それが $a:b=c:x$ という関係に内在的にすでに決まっているということだけは「直ちに分かる」はずである。そして重要なのはむしろこちらの意味の「直ちに分かる」ことであり、これに対し x の値そのものが直ちに分かるかどうかは、二次的な重要性しかもたないと私は考えている。

では、それがどう重要なのか。いよいよ本論の締めくくりに入る。

IV おわりにースピノザからもらった勇気

(1) 残る論点は…

スピノザの言う「直観の知」がどういうものなのか、これまで検討してきた。残る問いは、なぜゲーテはこのようなスピノザの「直観の知」から「全生涯を事物の観察に捧げる勇気」をもらったと思えたのか、そしてゲーテがもらったという勇気は一体どういう「勇気」であったのかということである。

勇気はドイツ語で「Mut」と言う。これはものごとに向き合う際の態度にかかわる概念である。したがって、「事物の観察」を行うにあたり、スピノザ的な「直観の知」が備わっているといないとで、観察者の態度にどういう違いが出るのかということから見ていこうと思う。

（２）自然現象は、手ごわい

これまで私は、ゲーテの自然科学方面のテキストをいくつか読む機会があったし、今も読み続けている。それで、つくづく感じたことがある。「直観」という語感に惑わされがちだが、自然現象の観察は、一見してあるいはボーッと眺めて「直ちに何か分かる」「直ちに結果が得られる」というものではない場合のほうがむしろ普通だということである（ただしそういう印象を受けたのは、たまたま私の読んだテキストの多くが、ゲーテがかなり晩年になってから成立した、若いころからの自分の自然研究歴、自然観察歴の長い長い道のを振り返っている、そういう性格のテキストだったこととも関係しているかもしれない）。結果が出るまでより詳しくより深く観察し続けなければならないし、続けたからといって必ず結果が出るとも限らず、空振りに終わることも少なからずある。観察の対象としての自然現象は、結構手ごわいのである。

これまで引用してきたゲーテのテキストの中でも、自然の事物の観察から何が直接の成果として得られるかということについては、かなり留保的というか、ある意味では気弱な記述が随所に見られる。たとえば前述の引用では、神の作品であるところの自然の個物を眺めると快い気分になると言っておきながら、ただちに「そうした作品のうち神はわずかしかなどに与えようとしてくれないけどね」と愚痴めいたことを言い足している。

それから今回一番詳しく紹介してきた、あの 1786 年 5 月 5 日付のヤコービへの手紙でも、「ぼくが[事物の観察を続けることで]どこまで進んで行けるか、そしてぼくに[進んだその先で]何があてがわれるか」それは一切分からないという、これもある種の弱気をにじませる長い関係節が最後の所に挿入されている。「パッと見ただけ」の生半可な観察で「直ちに分かる」ことは限られているし、観察の先行きも、観察を重ねた結果どういうところまで進んで行けるのかということも、自然観察においては往々にして不透明なのである。

それにも関わらず、1786 年 5 月 5 日のこの時点でのゲーテは「ぼくの全生涯を事物の観察に捧げる」つもりになっているし、実際、彼はその後亡くなるまでの 40 数年間を事物の観察に捧げ続けたのである。

（３）それでも「直観的に」分かること

どうしてそういうことができたのか。それは、自然の世界は意外と手ごわくて、一見しただけでは不可解なことだらけかもしれないが、それでも「直観的に」分かることがあるからではないか、そしてゲーテはまさにそれを「直観的に」分かっていたからではないかと思われる。それはつまり、一見不可解な「事物」も「延長属性の下で考えられた神」の何らかの様態であるという、まさにそのことである。このことだけは、目下のところ相手にしている自然現象にどう説明をつけていいのかどんなに迷っていても、そこを無視して「直ちに分かる」。そしてこの認識は、観察対象に選んだ自然の細かいところの「認識」でどんなに足踏みしていても、決して揺るがされることがない不動の認識である。この認識さえ直観的にもてれば、一見不可解でも諦めずに観察を続けることで解明できるという希望は、少なくとも

希望だけは、それこそ直ちに、そして原理的に保証されることになる。

そうであれば、前述の 1785 年 6 月 9 日の手紙にあった「個物をいっそう詳しく、いっそう深く観察することをスピノザ以上に鼓舞してくれる人物はいない」というくだりで、ゲーテがただ「観察する」と言わずに「いっそう詳しく、いっそう深く観察する」と言っているのも理解できる。「いっそう詳しく、いっそう深く観察する」という言い方は、観察という同じ活動の執拗な繰り返し、しつこいくらいの反復を前提にしないと使えない。いつか「いっそう詳しく、いっそう深い」理解に至るという希望を胸に、この先もしつこく、粘り強く観察を続けていく。ゲーテはスピノザの哲学に、そういう希望を「鼓舞」してくれるまたとない源泉を見ているのである。

また、例の「ぼくの全生涯を事物の観察に捧げる勇氣」について語っているくだりで、この勇氣を敷衍して「ぼくに届きうる限りの、そしてその形相的本質についてぼくが何らかの十全な觀念を形成できると望みうる限りの、一切の事物の観察に捧げる勇氣」(下線部強調/吉田)と少々くどいくらいに言い直している箇所にも納得がいく。「ぼくに届きうる限りの」という言い方は、まだ観察が届いていない対象、そこへ至っていない対象が多々あるという自覚を前提にしないと使えないし、そして「その形相的本質についてぼくが何らかの十全な觀念を形成できると望みうる限りの」という言い方は、まだ十全な觀念の形成に至っていない観察対象が多々あるという自覚を前提にしないと使えない。それをふまえた上での「一切の事物の観察」とは、時間的にも空間的にもただならぬ奥行きを備えた活動にならざるをえないわけで、そういう活動をおのれの全生涯をかけて続けるというきわめて息の長い勇氣を、どうやらゲーテはスピノザの「直観の知」からもらっていたようなのである。

(4) 自然に「裏」はない

本日は 1780 年代半ばから後半にかけての、ゲーテが 30 代後半とまだまだ若かった時代のテキストを中心に話を展開させていただいた。ところが興味深いことに、本論の主題の一つでもあった延長の世界＝自然の世界の因果的自己完結性というあのスピノザ的発想を、どうやらゲーテは後年になればなるほど自らの思想の中核にあたる部分に、いわば確信犯的に取り込んでいったようなのである。

後年のゲーテは、自然現象は機械論的必然性に縛られているが人間精神は自由であるという、そういう(人間さまの自己理解にとって誠に都合のよい)対立的なとらえ方に対して、さまざまな著作の中で懐疑的な態度を示している。たとえば彼が『詩と真実』第 16 章で「スピノザがあれば遠慮なく強調してみせたこの対立」(FA14, 732)と呼んでいるのも、自然という一つの世界の中に法則的必然性と自由意志という、2 系列の因果性の対立的並存関係を読み取ろうとする、そういう見方のことである。言うまでもなく、このような見方を西洋哲学史上類をみないほど厳しく退けようとしたのがスピノザであり、ゲーテはまさにそれを強調しようとしてここでスピノザの名前を出しているわけなので、『詩と真実』のこのくだりは「スピノザがあれば遠慮なく、そのような見方が成り立たないことを強調してみせ

たこの対立」という意味にとらなければならない。

スピノザに言及しながら、ゲーテはこの箇所ですべてのように言っている。ひとは動植物が必然的因果性ではなく、みずからの意図や目的にしたがってふるまっているかのような現象を発見すると、それを不気味がる。また逆に、自由なはずの人間が周囲の事情に変に流された不合理な行動をとっているのを見ると、やはり不気味なものを感じてそれに非難罵倒を浴びせたりする。しかしそういう二元的な対立の図式、自然は必然で精神は自由という割り切った図式でものごとを理解しようとするのはもうやめたほうがよいのではないかとゲーテは言う。そしてゲーテ自身の創作活動なども、唯一の自然の力がこの唯一の自然の世界に自ずから発露し展開してくる、そういうものと考えたほうが腑に落ちるような気がすると言う（FA14, 731-733）。

それから、『詩と真実』と執筆年代的にそれほど離れていない時期のゲーテの作品に『親和力』という小説がある。以前別のところで書いたことがあるが、これは本当に不思議な作品で、緻密な人形芝居を見せられているような印象を受ける小説である。登場するのは2組の男女で、当初「この人にこの人をめあわせてはどうか」と目論まれていたのとは別のペア同士で惹かれ合ってしまった、二進も三進もいなくなって結局4人中2人があえなく餓死を遂げる。恋愛のもつれで餓死とか意味が分からないと思うが、本当にそういう筋なのである。登場人物たちは何かというと分別臭いことを言ったり書いたりするのだが、それでいて自分の中の惹かれ合う気持ちを全くコントロールできていないので、肝心な場面ほど行動がカクカクしているというか、人形芝居の人形のようにぎこちなく見える。

これは彼らを「裏から」操る、つまり彼らの行動に精神的な世界から介入してくる「神さま的な意志」があるからではなく、ゲーテは恐らくその逆で、むしろそういうものがないからこうなるのだと言いたいのだと思う。人間存在もその一部であるところの自然の世界、これは先に何度か述べたように、スピノザ的には延長属性の世界として因果的に自己完結している。つまり、これもゲーテが随所で繰り返す言い方だが、「神は自然の内に」そして「自然は神の内に」いわば余すところなく表現し尽くされている。だからこそ事物の観察が即、神の認識につながるわけであり、そこに「余り」は出ない。神の気まぐれな介入もなければ、人間モードの神に他ならない人間の「自由意志」による介入もないのである。

「そうじゃない、そこに余りは出る、いや出ないとやり切れないだろう」、そう考えるとヤコービになる。ヤコービは逆で、「自然は神を隠す」と言った。つまり、いくらゲーテのように一生懸命自然を究明しても、そこに少なくともヤコービが求めているような神、つまり人間に関心を持ってくれる人格的な存在としての神の姿は見つからない。だから「自然は神を隠す」と言うのである。

『親和力』を発表した数年後、1811年のメモの中で、ゲーテはこのヤコービの言葉にいたく憤りを示している（FA17, 246）。自分がそれこそ生涯をかけてやってきたし、やろうとしていることの意味を全否定されかねないわけだから、無理もないことである。そしてこの、ささくれ立った気持ちを静めるためにゲーテは何をしたかという、『エチカ』を読んだの

である。『エチカ』を久しぶりに読み返していたら、気持ちが落ち着いたと同じメモの続きに書いている。気持ちが落ち着く、安らぐということで、「安らぎ」という言葉が印象的な『エチカ』の一節を引いて終わりにしたい。

「神の直観的認識から生じる心の安らぎ (acquiescentia animi)こそ、幸福に他ならない」
(『エチカ』第4部付録4項)

ヤコービの言葉に気持ちがささくれ立ったゲーテが『エチカ』を読んで再び安らいだとき、彼が感じていたある種の幸福感というのも、まさしくこういうものではなかったかと思う。私の話は以上である。長時間にわたるご清聴に心から感謝申し上げる。

* 本日の講演には、以下の競争的研究資金による成果が含まれる。

・日本学術振興会・科学研究費助成事業（科研費）基盤研究（C）「『共生空間』生成を巡る比較研究：ユダヤ教徒の複合アイデンティティを軸として」（課題番号：21K12435）

質疑応答

- Q1 「直観の知」に対するゲーテの理解についてどう考えるか
- Q2 AI の進化をスピノザ的にはどうとらえるか
- Q3 日本文化の多神教的世界観とスピノザの汎神論的世界観との関係をどうとらえるか
- Q4 on-line : 「直観」の理解と使い方に違いがあるのではないか
- Q5 on-line : 「見る直観」と「感じる直観」の違いについて
- Q6 on-line : 科学的実証がないものについても「直観の知」はあり得るのか
- Q7 on-line : ゲーテは「表象知」の可能性について言及したことがあったのか
- Q8 on-line : スピノザの思想は仏教思想と重ねたときにどう理解されるか
- Q9 on-line : 1880 年代頃のドイツのスピノザ研究はどのような状況だったのか

Q1 「直観の知」に対するゲーテの理解についてどう考えるか

今期の芥川賞を安堂ホセさんの小説と鈴木結生さんの『ゲーテはすべてを言った』という小説が受賞したが、鈴木結生さんの『ゲーテはすべてを言った』は、ゲーテは文学から自然科学まで、高尚なことから下世話なことまでなんでも知っていて、なんでも言っているという、そういう小説かと思った。

そのゲーテが 25 歳のときにワイマールへ行って、そこでスピノザを読むようになるのだが、そのなかでスピノザは「知る」ということを「想像知」「理性知」「直観知」の 3 種類に分けている。「想像知」は主観的な知識、「理性知」は概念的、学問的に分かるということである。普通の人はこの概念的、学問的に分かっているだけでそれで「分かった」と思うのだが、スピノザはそうではなく 3 番目に「直観知」を挙げている。これは神が見えるとか、自然の本質が見えるというような、見ただけで分かるという知識で、それが本当に分かることであり、学問的に分かっていたり概念的に分かっていたりするのとは本当に分かっていることではないということを言ったのだと思う。

スピノザは 17 世紀の人だが、その後、哲学が非常に難しくなって概念をこね回すようになるので、そういうものに対する異議申し立てをし、思弁的にならない哲学を目指していた。最後の方で「勇気」という言葉が出てきたが、哲学をしていて思弁的にならないようにするのはとても勇気がいる、そういう勇気だったと思う。

ゲーテはスピノザを読んですぐにそれを理解した。そこには、ゲーテがワイマールに行く前にフランクフルト、ヴェッツラー、シュトラスブルクなど、いずれも自然が綺麗なところにいたという背景がある。フランクフルトは今日では大都会で、ドイツでも一番汚い街だが、フランクフルトから東の方のワイマールに鉄道で向かって行くと自然の景色がとても綺麗である。ヨーロッパの中でも随一といってよいほど綺麗な景色が続く。そういう自然の中を歩きながら、あるいは馬で闊歩しながら、ゲーテは自然の中に神を感じていたし、自然の本

質が手に取るようによく分かった。そうして自然を見ることは神の息吹に触れることだという経験をずっとしてきたわけである。そういう彼がいる。

これは我々も、先生もご経験があるかもしれないが、山に登るとそういう人たちばかりである。なぜ山に登るのかというと、神の息吹に触れて幸福になるからである。だから何度でも登りたがる。山小屋で予約してきた人も突然きた人も一緒に雑魚寝していて、一部屋に10人くらいいると半数以上、あるいは2/3の人は山の中に神が見えるから山に来ていると言う。そういう経験をしている人ばかりである。山を見て神の息吹、自然の息吹に触れている。隣で「富士山は玄武岩や花崗岩でできている」と地質学的な説明をしたり、富士山の植生や、棲息している野鳥などの学問的な話をする人もおり、それも悪くはないが、そういう人はあまり神様が見えていないと思ったりする。学問的な問題接点も大事だが、同時にあまり学問的な話ではなく、神の息吹を楽しもうと思うところもあり、それはスピノザのいう「理性知」と「直観知」のズレだと思う。

そういう問題をゲーテはスピノザに即しながら深く考えたと思う。さらに、彼は1786年から88年までイタリアに行っていたが、その直前、ワイマールでシュタイン夫人とあることで親しくなり、親密な手紙のやりとりをしていた。その中で、ゲーテはシュタイン夫人に宛てて「植物の形の本質が見えるようになった」と言い、それをスピノザの形相的本質と結びつけている。ゲーテが「植物の形の本質」と言っているのは、たとえば京都植物園にいくと多種多様な花が咲いていて、千差万別だが、それらはすべて一目見て植物だと分かる。それについて植物学者は「植物は動物とは違って動かない」とか「光合成をする」とか、いろいろな言葉で説明するが、それは「理性知」である。そうではなく、一目見て「これは植物だ」「これは動物だ」「これは猫だ」「これはバラ科」「ユリ科だ」と分かるのは形の本質が見えることであると、そういうふうに理解し、それをスピノザの形相的本質だというようにゲーテは理解したと思う。

つまり、概念的、学問的に自然を理解するのではなく、目で見て理解する。これが人間であり、そういうふうに生きるのが大事で、概念の世界、学問の世界に逃げたら人間は墮落すると思っていた。それをスピノザは言葉で語っているが、(ゲーテは)スピノザが言葉ではなくいきいきとした生の世界に引き戻してくれると思っていたのではないだろうかと思っていたと思うが、いかがだろうか。

(吉田)

今のお話だと、「理性の知」と「直観の知」をある種の対立関係でとらえる、つまり「理性の知」はものごとの構造を学術的に明らかにしていくような知のあり方で、それに対して「直観」はそういう面倒なところを飛ばして、一目見て動物なら動物、植物なら植物の原形を理解するような知のあり方だという、そういうご理解をされていたかと思う。

本日の考察の中心になったのは1786年5月にヤコービに出した手紙で、ゲーテがイタリアに発つのはその後であり、原形を「直観」という話が出てくるのはその時期のことになるわけだが、ゲーテが植物、動物の原形という発想に至って、それが直観できるといった

ときの「直観」は、恐らくスピノザの「直観の知」からするとかなり内容的に肉付けされたものになっているかと思う。

これは以前、平尾昌宏氏が「ゲーテ・スピノザ・スピノザ主義—誰が『神即自然』を語ったのか」(『モルフォロギア』第35号(2013年)、p.2-28)で述べたように、スピノザ自身の思想はかなり言葉が少ないという語弊があるが、薄く設計されているので、人はその薄いところに自分なりの盛り込みをしたがる。それがスピノザの解釈が人それぞれに分かれていく一つの原因だと、そういうことを言われていて大変腑に落ちる思いがしたのを覚えている。ゲーテの場合も、恐らく基礎のところスピノザから学んだ「直観の知」がありながら、そこにどういう経緯があったのかは明確に特定できないが、自分なりの肉付けを施して形態学を作り上げていったのではないかと思う。

一つだけ指摘しておきたいのは、スピノザ自身は「理性の知」と「直観の知」を対立関係でとらえるのではなく、人がものごとを理解するときの車の両輪のように理解していたのではないか。つまり互いに補い合うような関係で理解していたのではないかというのが私の見立てである。理性によってものごとの原理的な構造を明らかにしていく歩みももちろん重要だが、それは結局人間のやることなので、順調に進んでいくだけではなく、止まったり後戻りしたりするところがある。しかし、そういうときでも、今自分の目の前にあるものが唯一の原理である神の属性の何らかの様態であるという認識は動かない。そうすると、今足踏みしていても諦めなくてよい。理性で足踏みしているときは「直観の知」が支え、あらゆるものごとを「直観」というあり方で見ることができるようになれば、理性によってその構造を明らかにしていくためのモチベーションも得られるわけである。そういうモチベーションをもしかするとゲーテは「勇気」と言ったのではないかというのが、本日の講演で私が一番言いたかったところである。

Q2 AIの進化をスピノザ的にはどうとらえるか

私自身はスピノザ、あるいはゲーテそのものを知っているわけではないが、ゲーテが自然志向であるというのはすごく魅力的だと思った。

本日の議題としては、スピノザがいう「神」が結局は仮定されていることが大きくて、私自身は一神論でも多神論でもないが、日本人のあらゆるものに神が宿するという概念からすると、絶対的の神というものを最初に置いてしまうとあらゆるものが説明できてしまう。それに対して、ゲーテはやはり分からないからすべてをじっくり観察していくという思想に至ったのではないかと感じた。

ところで今、世の中的には生成AIが進化し、「Artificial General Intelligence」という汎用人工知能、あるいはシンギュラリティが20年ほどでくるのではないかという議論が起きている。そうすると「神」ではなく、シンギュラリティを超えたAGIのようなものに対して我々はどういう概念で人間として生きていくのかという、その辺りがこれから問われていくのではないか。先ほどのスピノザの「神」というもの、たとえばシンギュラリティを超え

た Artificial General Intelligence のようなものを前提に考えたときに、人間がどう生きていくか、考えていくかということについて、あらゆるものに神が宿る、あらゆるものを探求していくというゲーテ的なアプローチでしか過ごしていけないのではないかと感じた次第である。そういうことに関してどのようにお考えだろうか。

(吉田)

本日の話の中心にあった、ゲーテがスピノザに示している共感と今のご質問がどうリンクしていくのか、自分としても考えあぐねているが、一つ言えるのは、スピノザは動物、植物、鉱物といった存在のあり方のさまざまな違いを、特に命あるものと命なきもので線引きしていないということである。たとえば机は無生物だが、机モードの神であり、猫は普通は生物だと思われているが、それも猫モードの神であり、猫よりは知性を持っている私たち人間存在もやはり人間モードの神である。そうするとその延長で、人工知能も、計算能力はすでに人間以上のものがあるが、シンギュラリティを突破して、さらに人間以上の知性の持ち主になってしまったとしても、それはそういうものに様態化した神のあり方ということになる。

そうとらえると何があっても驚かないし、何が起きてもおかしくない。つまり何でもありという方向に私たちの思考を拓いてくれる。何があっても致命的な断絶がそれによって起きるのではなく、振り返って解きほぐせば、人間が理解できるものとなるであろうというように、生命なきものから生命へと至り、そして人間へと至って、超人間的な何かへと至るものすべてを、ある意味フラットにとらえようとするのがスピノザの哲学の特徴ではないかと考えている。

それは前述のように、内容的には薄く設計された哲学であるから、そこに人々は自分の生の営みを重ね合わせて、その薄い基層の上に自分なりの盛り付けを行おうとするわけである。この辺りの不思議さを説明するのはなかなか難しいが、つまりシンギュラリティを仮に突破してしまうような AI が現れるとして、それは驚くべきことでもないし、批難すべきことでもない。とにかく、スピノザ的な現実に対するそういう腰の据わった態度に繋がるのではないかということである。

(質問者)

我々はゲーテ的なアプローチでいけば乗り越えられるというように理解した。

(吉田)

ゲーテがそれに対してどう考えるかは、私よりも高橋先生 (=Q1 の質問者、高橋義人先生) のほうがお詳しいと思う。

Q3 日本文化の多神教的世界観とスピノザの汎神論的世界観との関係をどうとらえるか

主観と客観、自然と物質、化学と数学、近代と現代から今に至るまで、日本の文化はゲーテの思想とかなり近いのではないかと私は思っている。八百万の神とか、すべてのものに神が宿るとか、俯瞰で観ることなどもそうだが、西洋思想的なものが主観で我を通すことととらえると、それと俯瞰で観るという日本的な思想のせめぎ合いの時代にきていて、宗教観に

しても何にしても、今後日本の役割はかなり重要になるのではないかと思う。そういうことを踏まえて、先生は今後のアプローチの仕方、先生としてのアピールの仕方をどのように考えられているのか。

(吉田)

ゲーテはともかく、日本文化の話とスピノザがどう結びつくかという、スピノザの著作の中に日本に対する言及は2箇所しかない。つまりキリスト教を信じていない日本人との間でも、もしキリスト教徒たちが自分たちの宗教を強引に押しつけたり、自分たちの宗教儀礼を相手かまわず押し通そうとしたりしなければ、きちんと付き合っていけるというようなことを『神学・政治論』の中で述べている。『エチカ』では日本のことは全く出てこない。

また、日本文化の中の多神教的な世界観と、スピノザのいわゆる汎神論的な世界観は似ているようでやはり違った点もある。日本の多神教は山に山の神、トイレにトイレの神、川に川の神がいるというように、無数の神々が無数の自然の世界の現象に宿っているという理解だが、スピノザの「汎神論」はそうではない(ちなみに、スピノザの哲学イコール汎神論、そして汎神論イコール無神論という見解を一般に広めたのはヤコービであり、これはこれでスピノザの哲学のある一面を見極めた上での切り分け方だと思うが、もちろんスピノザ自身は汎神論という言葉を使っていない)。スピノザの思想に「汎神論」という言葉を当てるのであれば、そこで言われているすべてが神であるという思想は、あらゆるものが唯一の存在の原理である神の、そのときそれなりの表れであるということである。したがって、やはり実体としての神は無数にあるのではなく、一つきりしかいないことになる。その意味では、汎神論は汎神論でも多神教的汎神論ではなく一神教的汎神論なのだと思う。

そういうところで微妙に合わない面はあるかと思うが、森羅万象すべてが神の何らかの様態、表れであり、決して何者かの意志によって存在させてもらっているものではなく、むしろ神なので、それ自身の根拠によって存在している何かであるという見方はスピノザの哲学に根強く備わっている。ただ、それが日本文化の特質とどう関わるかという、それはそれで別に考察が必要だと思う。

(質問者)

最近、量子力学的に、データを取ろうとする人間が見たいようにしか物質は動かないということが科学的に証明されてきた。つまり、観察する人間の見たいような現実がデータとして出てくるという話で、それは今の話にも通ずるのではないか。見たいように見る、主観で見る、俯瞰で見る、しかし真実の一つということが森羅万象によるような形でいろいろと分かってきて、魂の存在や、肉体と精神、心と病なども含めて、ゲーテや昔の人たちが悩んだことの答えが、今出てきているのではないかと私は勝手に思っているが、いかがだろうか。

(吉田)

確かにスピノザは心と体という二元論的な見方については、どちらも一つの同じものの互いに因果関係を及ぼすことのない同時並行的な二つの側面だと、そういう具合に決着をつけようとしたわけだが、それが融合や俯瞰ということになるのかどうか。スピノザに話を

戻そうとすると逆におかしな話になってしまうかもしれない。

(他の質問者)

今の質問を補足すると、日本の関係については、吉田先生が訳されたスピノザの『神学・政治論』の中に「日本」という言葉が 2 回出てくる。スピノザがオランダに住んでいた当時、日本は江戸時代でオランダと交渉があったことから、スピノザは日本のことを聞いていたと思う。これは岩波文庫の『神学・政治論』を読んだときも思ったが、吉田先生の光文社文庫版はとても分かりやすく、そこで「日本」なのだと改めて思った。

また、日本的な考え方に近いということについては、これはゲーテだけではなくスピノザも近いと思う。欧米の考え方は主観と客観を二分し、対象が客体化する。それに対してゲーテは特に「対象的思惟 (gegenständliches Denken)」という言葉を使っていて分かりやすいが、対象に即した考え方をする。これは日本人が、たとえば茶席で茶碗を回したり隣の人に挨拶したりしながら、考えているものがそこから湧き出してくる、ものに即して考えるということをしているのに近く、ゲーテが「自分は対象的思惟だ」と言っているのはどうも日本人的考え方をしていると言っているのに等しいと思う。

スピノザの場合も世界は一つしかなく、そこに神がいて、神の中に皆包まれている。山の中に神がいるが、同時に神は自分の中にもいて、その間に隔たりはない。それがスピノザの世界である。したがって、質問者が日本的と言われたことには同意である。

Q4 on-line : 「直観」の理解と使い方に違いがあるのではないか

「直観」の理解について、同義的に使われている場合と違う場合があるのではないか。

(吉田)

「直観」と訳されている言葉はラテン語で「intuitio」、ドイツ語では「Anschauung」と別々なので、この言葉が本当に一義的に使われているのかどうかという問題はかなり根深いものがある。スピノザはもちろんラテン語だけで書いているが、ゲーテがこの二つの言葉を使い分けていたかどうかは少し微妙だと思う。

以下、あくまで私がゲーテのドイツ語を読んでいて感じる印象である。ゲーテはカントの批判哲学を 1780 年代から 90 年代にかけて体験しているが、カントの場合は「直観」という言葉をただ感性的なデータ（視覚情報も入るがそれだけとは限らない）を人間が時空的な枠組のもとに受け取る能力という、かなり限定された意味でしか使わなくなる。そのカントの「直観」と比べると、ゲーテがたとえばカントの『判断力批判』にあやかって書いた『直観的判断力 (Anschauende Urteilskraft)』という小文で使っている「anschauen/Anschauung」という言葉には、ただ単にデータを受け取るのではなく、見ることによって何かが直ちに分かってしまうという、そういうニュアンスが明らかに込められている。これは恐らく批判哲学的に薄められた「Anschauung」の「直観」ではなく、むしろラテン語の「intuitio」、中まで見通すという感じだと思うが、そちらに引っ張られて使っている印象を受ける。

また「Mut」というドイツ語が「勇気」と訳されるが、これも我々が日本語として使って

いる「勇気」とはかなり違うのではないか。私は先にある種の態度と説明したが、「Mut」という言葉をどう理解しているかという、先行き不透明とか不確実な世界の中にいて、それにも関わらず何かをし続けようとする、そういうある種の「気概」であるとか「心意気」であるとか、恐らくそういう言葉として少なくともここでは使われていると思う。「勇気」以上の訳をすぐには思いつかないが、もう少し良い訳があれば逆に教えていただきたい。

Q5 on-line : 「見る直観」と「感じる直観」の違いについて

直接観ると書く「直観」と直接感じると書く「直感」の意味、意図を教えてください。

(吉田)

「ちょっかん」という言葉は日本語ではいろいろな字で書かれていて、本日使った「直観」と、直接感じ取る方の「直感」、今は少なくなったがヤマ勘が働くといったときの「直勘」という文字を使う人もいます。正直どう使い分けられているかは私も分からないが、「直感」は感覚的に分かるということであり、「直観」は一心に見て取ることでそこに何かを直接掴むという無意識の使い分けのようなものがなされている印象である。ヤマ勘の方の「直勘」については申し訳ないがよく分からない。

Q6 on-line : 科学的実証がないものについても「直観の知」はあり得るのか

科学的実証と「直観」との関連について、スピノザは比例数の例を挙げて三つの人間の知のあり方を説明しているが、簡単な数だと一見して分かるというのが「直観の知」であった。それに対して、九九を覚えていれば子どもでもわかると言われたが、逆に言うと九九を覚えていないと「 $1:2=3:x$ のとき x はいくつか」と言われても恐らく分からない。そうすると理に合わないもの、ロジックではないもの、科学的な実証が今のところないものではあるが「直観知」であるということはスピノザには可能なのか。

(吉田)

理に合わないものとして具体的に何を思い浮かべておられるのか分からないが、たとえば心霊現象など、まだ検証が及んでいないものだろうか。その現象が観察データ的に信頼のおけるものだと、今は説明ができないけれども、データとして信頼がおけるのであれば何らかの説明がつくはずだというのは恐らく可能だと思う。しかし、それ以上のものではない。解明までどのくらいかかるか、近いのか遠いのかまで含めて、分かるだろうということは直観できるが、具体的にそこに進んでいくためには、私たちは第二種の認識のほう、つまり理性のほうを一步步駆使していかなければならない。

Q7 on-line : ゲーテは「表象知」の可能性について言及したことがあったのか

文学をやっていたゲーテが「表象知」の可能性について言及したことはあったのか。

(吉田)

スピノザが三つに分けた認識の種類のうち第一種の認識と呼ばれるのが「表象知」や「想

像知」と訳される「imaginatio」だが、ゲーテが「表象知」の可能性について言及していたことがあったか否かについて、私はゲーテに関しては責任を持って断言できない。ただ「imaginatio」の世界についてゲーテ作品で私が思い浮かべるのは、本日の最後に少し出した『親和力』の話である。あれは私の理解では「imaginatio」にとらわれた男女がまるで操られた人形のようにどうすることもできずに滅びていく話なので、もしかするとあそこでゲーテが描いたものこそスピノザのいう「表象知」に雁字搦めにかからめ取られた世界かもしれない。スピノザはそこから理性の力、直観知の力で抜け出す可能性を考えているが、ゲーテは少なくともあれを書いた時点では必ずしもそちらの可能性に興味を示しておらず、むしろ「表象知 (imaginatio)」ですべてが進んでいく世界のようなものを描こうとしていたのではない。今思い浮かぶのはそのくらいである。

Q8 on-line : スピノザの思想は仏教思想と重ねたときにどう理解されるか

デカルトの二元論に対するスピノザの思想、あるいは仏教思想と重ねたときにどのような理解になるか。

(吉田)

スピノザの哲学と仏教について、仏教のどういうところと比べるかにもよるが、恐らく大乘仏教におけるすべてのものが互に関連づけられ合っているという縁起的世界観のことを思い浮かべておられると思う。万物が万物を映し合っているという考え方はもちろんスピノザにもないわけではないが、私はやはりライブニッツなどのほうがその辺りはスムーズに結びつく印象を持っている。

仏教の分厚い議論と比べると、スピノザの思想は要点しか言っていない、薄いということの本論でも何度か言ったが、薄いからそこに何を盛り込むかで似ているようにも見えてくるし、そうではないようにも見えてくる。そうすると、内容を盛り込んだうえで仏教的な万物が照応し合っている展開にストレートに結びつくのは、むしろライブニッツではないかと思う。

ただ、ゲーテも言ったように「スピノザの目線の前ではすべての個物が消え去ってしまうように見える」という、ヤコービが論点化したことで有名な問題が、カント以降のドイツ観念論の中で延々と「スピノザにおける個物が消えてしまう問題」として論じられている。その個物が万物を飲み込む統一的な原理のもとに立ち帰って消えてしまうように見えるスピノザ哲学のある側面と、仏教的な世界観を重ね合わせることも一面では可能だと思う。ただし私はスピノザの哲学をそのようには解していない。今言えるのはこのくらいである。

Q9 on-line : 1880年代頃のドイツのスピノザ研究はどのような状況だったのか

1880年代頃のドイツのスピノザ研究の状況を教えてほしい。

(吉田)

この場で答えできる限りのことを私の記憶だけに頼ってお話しするが、19世紀後半に

それまで見つかっていなかったスピノザの初期作品、短論文（『神、人間および人間の幸福に関する短論文』）と通称されるテキストが発見された。『短論文』というのが実は割と分量がある。これはスピノザが一度まとめたが、その後幾何学的な順序に従って、つまり『エチカ』のやり方で書いたほうがうまく表現できるのではないかということに気づいたため、言わば不完全な『エチカ』のようなものとしてお蔵入りにになっていたもので、スピノザが亡くなった後、彼の遺稿をまとめて出版しようとした友人たちも、これは収めなくてよいのではないかということになってそのまま散逸してしまったテキストである。見つかる前からその存在は長いこと知られていて、18世紀の初めにオランダを旅行したドイツ人が、アムステルダムの本屋でこっそり見せてもらったことを記録に書き残したりしている。それが1860年代にオランダ語の写本が立て続けに二つ出てきて読めるようになった。『短論文』は一義的に読むことの難しいテキストだが、『エチカ』に至るまでのスピノザの思想形成のあり方を実地に示してくれる貴重な資料ということで、徐々に研究され始めていた時代である。

その反面、『神学・政治論』や最晩年の絶筆『政治論』など、スピノザの宗教哲学、政治哲学的な方面についても徐々に再び研究され始めていた時代になる。ただ、ベルリンにいて、しかも医学の学位論文を書こうと思っていた鷗外がそれをリアルタイムでどの程度知っていたのかについては当然分からない。

発 行 日	2025 年 10 月 31 日
講演著者	吉田 量彦
編集発行	公益財団法人 国際高等研究所 <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ 大仲佐代子

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
(国際高等研究所庭園)